

# フランスの考古学におけるコロナウイルス危機の影響

－ 2020年3月から2021年8月までの期間－

アキアン・ミリアム

## はじめに

一年半以上前、新型コロナウイルスのパンデミックが世界中で起こり、広がった。当時、各国の生活、施設の運営、経済、政治、文化、国際関係、個人関係等々に対する、史上初の世界規模の広くて深くて長い影響となるとは誰も思わなかった。反対に、今は、新型コロナウイルスのパンデミックはいつまで、どこまで影響を及ぼすかを心配する声がどこでも聞かれる。新型コロナウイルスのパンデミックは社会の各レベル、組織や施設の運営、日常生活のあらゆる場面に影響を与えて、それらを深く変えた。考古学は歴史の研究だと言っても、現代社会の一部として他の現代社会の諸部分と同様に影響を受けた。コロナウイルスの危機は考古学の施設の運営や人々にも大きな影響を及ぼした。もちろん、フランスの考古学も同様にその影響を受けた。

## フランスでのコロナウイルスの衛生危機の波と衛生対策の全体的リズム

フランスでは、新型コロナウイルスのパンデミック危機は大きな社会的運動や地域選挙が行われていた2020年2月中旬に起こり、3月中旬に初の政府措置が取られ、3月17日に完全ロックダウンや厳しい外出制限が決められた。社会全体が止まるのは史上初めてのことだった。その最初のロックダウン（以降、第一期のロックダウンと呼ぶ）は一番厳しいものだった。そして2020年6月からロックダウンや外出制限が少しずつ解かれていった。

9月から感染者の人数はまた増加したので、マスク着用が色々な施設（公的施設、職場、商店など）では必須になり、9月末からまた段階的なロックダウンへと戻っていき、10月17日から夜間外出禁止になった。10月29日から12月15日まで再び完全ロックダウンや厳しい外出制限が決められた（以降、これを第二期のロックダウンと呼ぶ）。

同じように、三代目の完全ロックダウンや厳しい外出制限が2021年4月3日から5月3日まで決められた（以降、これを第三期のロックダウンと呼ぶ）。



図1 コロナウイルスによる2020年三月から2021年9月まで入院患者数

その三つの完全ロックダウンや厳しい外出制限の間に時期や地域によって様々な制限が決められた。特にレストラン、商店、文化施設（劇場、映画館、博物館等…）、大学などに特別な制限が課され、長い期間にわたり閉鎖を余儀なくされた。このように、ロックダウンの期間やロックダウンの解除期間が交互に繰り返された。期間、地域、施設などによって異なるルールがあり、状況はかなり複雑であった。

その不安な状況は考古学の世界にも影響を及ぼした。フランスで考古学の世界は、異なるミッションによって主に四つのグループに分けられる。

ミッション	発掘調査	公衆向けに活用するや授業
	事前発掘調査（緊急発掘調査）	博物館や史跡やモニュメントの観光地
	考古学研究の計画発掘調査（学術発掘）	大学と教育

もちろん、各施設は中央のミッションと同時に他の色々なミッションも持っているが、グループの中央のミッションによっては新型コロナウイルスの危機の影響の程度や質が異なると言える。

そのように、フランスの考古学全体に新型コロナウイルスのパンデミックがどのような影響があったか簡潔に説明したい。考古学の全体と言うとき、この文書では幅広い意味で事前発掘調査（救急発掘調査）や考古学研究の計画発掘調査を行うプロの考古学の組織から公衆向けに活用する機関（博物館など）や大学の授業、学生まで含めている。

## 事前発掘調査とコロナウイルスパンデミックの影響

事前発掘調査（救急発掘調査）は国立事前的考古学研究所（INRAP、インラップ）、地域の文化庁長官（DRAC、ドリック）の考古学調査サービス(SRA)、民間の事前発掘調査企業が行っている。この考古学の企業は最初のロックダウンや外出制限により3月17日から5月まで突如全ての発掘調査の作業を止めなければならなかった。遺跡や遺物を守るために、半日だけでその休止の準備を完了した。

2020年の春に多くの考古学的略奪があったと思われる南米や中東など、メディアで大きく取り上げられた世界の他の地域とは異なり<sup>1</sup>、フランスでは、第一期のロックダウンの期間に全国の発掘が突然の比較的長い時間停止したにもかかわらず、発掘されていた遺跡の略奪や劣化はなかったと言われている。第二期と第二期のロックダウンには、より柔軟な規制が導入され、事前発掘調査活動の継続が可能となった。第一期のロックダウンでは、すべての発掘作業が完全に停止していたため、第二期や第三期と同じような物流面での問題は発生しなかった。

このパンデミックにより、社会全体、特に集団が集まる空間や国家機関において、マスクの着用、ハイドロアルコールジェルの使用、空間や道具の消毒、同じ場所に集まる人数の制限など、特定の衛生プロトコルが実施されるようになった。このような特殊な衛生プロトコルは、特に最初の頃、マスクやハイドロアルコールジェルの不足や、施設やスタッフの管理の難しさなど、多くの物流的な問題を引き起こした。

ロックダウンやパンデミック問題という例外的な状況下で、特に複数の連続した衛生プロトコルが実施されたことにより、人々や機関の仕事のやり方が見直され、衛生用品の購入に若干の追加費用が必要となった。

この危機が事前考古学に与えた影響は、主に第一期のロックダウンのすべての発掘調査が停止した2ヶ月間に集中していた。この強制的な発掘停止や、考古学基地や研究所での厳しい作業制限は、公立施設か民間企業であるかを問わず、すべての事前考古学企業に影響を与えた。

しかし、国立事前考古学研究所（Institut national de recherches archéologiques préventives、Inrap、インラップ）は2020年の年次報告書の中で、第一期のロックダウンの後、発掘の遅れが急速なペースでほぼ完全に取り戻されたことを強調している。インラップは、2020年の目標の80%を達成したと言われている<sup>2</sup>。報告書では、2019年の227件に対し、210件近くの事前発掘が実施されたことが伝えられている<sup>3</sup>。また、最初のロックダウンでは、フィールドやラボでの作業ができない役員が自宅で作業を続け、その時間を使って既に終えた発掘の報告書などの作成を終わらせている。このように、事前発掘調査は、パンデミックという例外的な状況下でも、わずかな影響しか受けなかったようである。

---

<sup>1</sup> « Le trafic de biens culturels a explosé pendant la pandémie de Covid-19 » （文化財の売買は、コロナウイルスのパンデミックの際に爆発的に増加した）, *Le Monde.fr*.

<sup>2</sup> INSTITUT NATIONAL DE RECHERCHES ARCHEOLOGIQUES PREVENTIVES, *Rapport d'activité 2020, 2021*, p. 37.

<sup>3</sup> INSTITUT NATIONAL DE RECHERCHES ARCHEOLOGIQUES PREVENTIVES, *Rapport d'activité 2020, 2021*, p. 43.

だがインラップの示した数字によると、工事現場での考古学診断依頼は 11.1%以上減少している<sup>4</sup>。この減少は、特に国や地方自治体が主導する建設プロジェクトに関連して要求されるものに関係している<sup>5</sup>。公共事業を請け負う会社でも、同様に入札件数の減少が見られたようだ<sup>6</sup>。この傾向は、中期的には事前発掘の数を機械的に減少させることにつながると想定できる。

インラップは、診断・事前考古学的発掘の任務に加えて、考古学的な普及・研究・保存活動を行っている。しかし、最も直接的かつ中期的な悪影響が認められているのは、間違いなく考古学の普及と活用のレベルである。度重なるロックダウンと、一般公開に対する数々の厳しい制限とによって、インラップは公開プロモーション活動がほぼ半分に減少し<sup>7</sup>、訪問者数が 2019 年の 240 万人から 2020 年には 63 万人に減ったことを指摘している<sup>8</sup>。

しかし、衛生危機の状況下では、対面での活動には多くの制限があるため、いわゆる「オンライン化」された普及手段を開発するために大きな努力が払われていた。インラップはウェブサイトでの様々なコンテンツ（ニュース、ニュースレター、教育コンテンツなど）を公開し、ウェビナー、ドキュメンタリー番組への参加、インターネットで自由にアクセスできる考古学専門のポッドキャスト番組の立ち上げなどが挙げられる。このようにインターネット資源への取り組みが強化されたことで、特にインラップのウェブサイトへの訪問者数が 2019 年の 96 万人から 2020 年には 150 万人、すなわち訪問者数の 9.7%の増加が可能となった<sup>9</sup>。

この衛生危機の影響の一つとして、考古学研究を促進するための努力がデジタル技術に向けて部分的に再編成されたように思われる。また逆に、インラップは現代的な問題を考古学的に捉えた、新しいタイプの軽やかな巡回展示会「アーケオカプセル」<sup>10</sup>も開発した。

## 民間事前考古学調査の企業とコロナウイルスパンデミックの影響

新型コロナウイルス危機が民間の事前発掘調査会社に与えた影響は、インラップと同様である。第一期のロックダウンでは、遺跡によっては多少中断していたが、比較的早く発掘が再開され、現在は活発に活動している。しかし、それは第一期のロックダウンによる発掘調査・建設現場の遅れが引き起こす不自然な結果である。

建築現場の延期による資金繰りの遅れは、事前発掘調査の民間会社にも影響を与えていた。建設企画の放棄、作業日の延期、作業の無期限停止なども衛生危機の影響であり、事前発掘調査の数に直接影響を与え、その結果、事前発掘調査に携わる企業、特に民間企業にも影響

---

<sup>4</sup> *Ibid.*, p. 41.

<sup>5</sup> 新型コロナウイルス：公共工事分野の評価と展望 | FNTF, <https://www.fntp.fr/dossiers/covid-19-bilan-et-perspectives-sur-lactivite-des-tp>, 2021 年 8 月 3 日のデータ。

<sup>6</sup> データ | FNTF, <https://www.fntp.fr/data>, 2021 年 9 月 4 日のデータ。

<sup>7</sup> INSTITUT NATIONAL DE RECHERCHES ARCHEOLOGIQUES PREVENTIVES, *Rapport d'activité 2020*, *op. cit.*, p. 39.

<sup>8</sup> *Ibid.*, p. 46.

<sup>9</sup> *Ibid.*

<sup>10</sup> 知らせ | 考古学と社会：Archéocapsule, <https://www.inrap.fr/archeologie-et-societe-les-archeocapsules-13968>, 2021 年 8 月 18 日のデータ ; Archéocapsule • 実習, <https://travaux-pratiques.fr/>, 2021 年 8 月 18 日のデータ。

を与えていた。第一期のロックダウンの際に部分的失業手当を使用することで、民間の事前発掘調査会社は人員の解雇を避けられた。

現在、遺物の処理センターでも発掘現場でも、マスク、手指消毒用ジェル、ソーシャルディスタンス、道具の個別使用など、通常の衛生プロトコルがすべて実施されている。いたるところにテレワークが普及し、遺跡に来る人は厳しく規制され、数も少なくなっている。また、オンライン会議も普及している。可能であれば、リモートミーティングが望ましいとされている。この期間のキーワードは、やはり「適応」であった。

そのため、組織やスタッフは、インラップと同様に、高い回復力と適応力を示した。しかし、Archeodunum社のオードリー・バラダット-ジョリー（Audrey Baradat-Joly）が指摘するように、第一期のロックダウンは、考古学者の同僚たちが町や都会に住んでいるか、田舎に住んでいるかによって、経験の大変さが異なった。考古学者はあまり良い給料をもらっておらず、小さなアパートに住んでいることが多いと説明した。都会では外出禁止のため、狭いアパートでは閉塞感が強まり、生活しづらかったかもしれない。

## 考古学研究の計画発掘調査とコロナウイルスのパンデミックの影響

考古学研究の発掘調査に関しては、コロナ危機の影響の総決算はまだされていない。省庁の年次報告書の発行を通じて、この問題をよりグローバルかつ総合的に捉えることができるようになるには、おそらく2022年の初めまで待つ必要があるだろう。現在までのところ、情報はまだ非常に断片的であるが、予定されていたほとんどすべての発掘キャンペーンが衛生管理を目的とする制限で中断されたため、衛生危機の影響は何よりも2020年夏の発掘キャンペーンで感じられたようだ。予定されていた発掘作業が主にフランスでは夏に行われるため、発掘と調査のプログラムが遅れてしまったのだ。一方で、2021年夏に予定されていた発掘調査は、今年（2021年）はあまり苦労せずに実施できたようである。2021年5月末の時点で、研究省のウェブサイトには、ボランティアを募集しているフランス全土の140近くの発掘調査が掲載されていた。今年（2021年）は予定されていた考古学的発掘がほぼ実施されたが、衛生管理を目的とする制限や、各遺跡で発掘調査に参加できる人数、特にボランティアの数が制限されていた。このように人手が減り、特にボランティアの数が減ることで、発掘作業の進行が遅れる可能性がある。

2020年には、予定されていた73件<sup>11</sup>の発掘しか行われなかったが、衛生管理を目的とする制限があり、それは特にボランティア参加者の数に関連していると思われる。このような研究の発掘調査の中止や延期によって生じる遅延や予算的・学問的な困難に加えて、大学の考古学コースの大部分がトレーニングコースの一環として、ボランティアとして考古学的な発掘に参加することを要求しているため、考古学の学生にとっては学士号を取得するための困難も生じた。そのため、ボランティアに開放されている計画的な考古学的発掘のほぼ半分が減少され、これらのトレーニングコースを実施できる組織が不足した。その不足は、衛生管理を目的とする制限により各公開の計画発掘調査のボランティアの数が制限されていたことにもまた関連している。

---

<sup>11</sup> 2020年6月29日付情報。

考古学研究部門、より具体的には事前・計画考古学調査は、短・中期的には確かにコロナ危機の影響を受けたが、この影響は限定的であり、解決に向かっていていると思われる。一般市民との接点が副次的かつ限定的なものである考古学専門のプロ部門が、より比較的迅速かつ容易に完全な活動を再開することができ、その結果、衛生危機による活動への影響を抑えることができたようだ。しかし、中長期的には、現在の衛生危機の結果である経済危機が、考古学やプログラムの発掘に関わる様々な団体に与える影響を検証する必要があるだろう。

逆に、同じことは、パブリック・アウトリーチ（博物館、協会など）や教育（大学）を中核事業とするセクターには言えない。これらの様々な公開機関は、この期間中、複数の衛生管理を目的とする制限によって大きな影響を受けていたからだ。

## 博物館とコロナウイルスパンデミックの影響

博物館は、一般の人々が集まり、混ざり合う場所であるため、特に衛生管理を目的とする制限の影響を受けた。第一期のロックダウン時には全ての博物館が完全に閉鎖され、2020年の夏に小規模な博物館だけには部分的な再開許可がおりたが、2020年11月から2021年5月末まで全ての博物館は再び完全に閉鎖された。大規模な博物館ではほぼ1年連続で休館することになった。

この長期間にわたる完全閉鎖を少しでも補うために、ウェブ展示を中心とした新フォーマットが設定された。しかし、2020年だけを見ても、文化省は博物館の総売上高が2019年に比べて64%以上の赤字になると試算している<sup>12</sup>。そしてこの赤字は、史跡とモニュメントの観光地の総売上高の65%以上の値に達している<sup>13</sup>。これに対し、2020年度に考古学関連の総売上高は19%の減少にとどまっている<sup>14</sup>。また、展覧会のスケジュールが変更され、博物館でのチームの仕事の仕方も変更を余儀なくされた。

## 大学とコロナウイルスパンデミックの影響

2020年、2021年には、大学教育もこの衛生危機の影響を大きく受けていた。2020年、大学は学士から博士まで約273万人の学生を受け入れている。18歳から29歳までの920万人の全若者のうちのほぼ30%にあたる<sup>15</sup>。しかし、博物館と同様に、ロックダウンの影響を受けた大学は、2020年3月にキャンパスを閉鎖し、できる限りオンライン授業に切り替え、それは7月上旬の年度末まで続いた。翌年度初めの2020年9月には、一部または全部

---

<sup>12</sup> 文化セクターへのコロナウイルス危機の影響, <https://www.culture.gouv.fr/Sites-thematiques/Etudes-et-statistiques/Publications/Collections-de-synthese/Culture-chiffres-2007-2021/L-impact-de-la-crise-du-Covid-19-sur-les-secteurs-culturels>, 2021年8月19日のデータ。この総売上高は2020年11月の第二期のロックダウンの影響を含めない場合である。

<sup>13</sup> これはあくまでも2020年を想定したもので、年末の第二期のロックダウンの影響を含めていない。

<sup>14</sup> 「文化セクターへのコロナウイルス危機の影響」, *op. cit.*

<sup>15</sup> 数字で見る高等教育, [//www.enseignementsup-recherche.gouv.fr/pid24683/l-enseignement-superieur-en-chiffres.html](https://www.enseignementsup-recherche.gouv.fr/pid24683/l-enseignement-superieur-en-chiffres.html), 2021年8月3日のデータ。

の対面授業を再開したが、2020年10月には新たなロックダウンによりオンライン授業に切り替えねばならず、この状態は年度末の2021年7月まで続いた。これらを合わせると、丸々12ヶ月以上オンライン授業を余儀なくされたことになる。

そのため、授業の形式や内容に適応したり、改革するための新たな課題が生まれたが、これは概ね達成された。これにより、教え方を見直したり、知識を伝えるための新しい教育手段や技術を試す機会が生まれたが、度重なる長期間のロックダウンと相まって、この非常に長期にわたるオンライン授業は、一般的に教え方や学び方の質に悪影響を及ぼした。教師も学生も、この教授法に伴う知的・精神的な疲労や、余分な仕事やストレスを訴えていたが、それに加えてロックダウンや社会生活の中で孤立しているという状況も悪影響を及ぼした。特に、大学のコースを一部または全部を中退する学生が非常に多く、そうでなくとも集中力や継続的な注意力に関して大きな問題を引き起こした。ロックダウン期間中に家族と接することのできなかつた学生は、一日中コンピューターに向かい、人との交流がないという、極めて孤独な状況に置かれることもあった。

学生は、日常的な頭痛、不眠、ストレス問題から、多かれ少なかれ深刻なうつ病に至るまで、この環境に由来する病気を発症することもしばしばであった。第一期のロックダウンの時点で、すでに30%の学生が心理的苦痛の兆候を示していた<sup>16</sup>。この傾向は続き、さらに悪化して、2021年1月にはこの数字が学生の32%にまで上昇した<sup>17</sup>。このように学生が抱える様々な心理的問題に対して、フランス政府は2021年3月、学生1人につき3回、45分間の心理相談（カウンセリング）を無料で受けられるパッケージを導入した。なかなか学生に知られなかつたこの制度も、今では相談件数28,386件、支援した学生は8,543人を超えている<sup>18</sup>。

このような学生の心理的な不安定さや孤立感は、特に大都市、特にパリでは狭い居住空間でも家賃が非常に高いため、非常に窮屈な住宅事情と結びついていることも多い。窮屈な住宅環境は、個人の心理的な幸福感に与える悪影響を増幅させる。この点については、予防的発掘の分野で働く（民間および公的機関）プロの考古学者の中で大都市に住んでいる人たちも、特にキャリアの初めの頃は給料が低い（せいぜい月に1,100～1,400ユーロ、142,000円～180,000円）、宿泊施設に関して同様の困難を経験していることが多い。

学生にとって、相次ぐロックダウンは、少なくとも58%が有給活動（仕事又はアルバイト）の喪失または減少の影響になった<sup>19</sup>。2020年には、40%の学生が、自活や日常生活の向上のために、学業に加えて有給活動をしているようだ<sup>20</sup>。しかし、第一期のロックダウンでは、アンケートに対し33%以上の学生が「経済的に困っている」と回答し、全体の6%の学生が「十分な食事ができなかつた」と回答した<sup>21</sup>。このような経済的困難は、次のロックダウンでも改善されず、むしろ悪化していったのである。

<sup>16</sup> « OVE Infos n°43 | Student life in 2020: uncertainty and vulnerability ».

<sup>17</sup> 18-24歳の若者の精神的衛生が心配される、<https://www.ipsos.com/fr-fr/la-sante-mentale-des-18-24-ans-plus-que-preoccupante>, 2021年8月25日のデータ；« Perceptions et représentations des maladies mentales »（精神疾患に対する認識と表現），p. 6.

<sup>18</sup> Santé Psy Étudiant, <https://santepsy.etudiant.gouv.fr/>, 2021年8月24日のデータ.

<sup>19</sup> « OVE Infos n°43 | Student life in 2020 », *op. cit.*, p. 5.

<sup>20</sup> *Ibid.*, p. 4.

<sup>21</sup> *Ibid.*, p. 5.

このような学生の生活環境の悪化を受けて、2020年9月の年度開始時から様々な学生の協会による食糧配給が行われ始めた。このような取り組みは、フランスのすべての大学に広がり、今年度も継続した。新年度の2021年9月からは少なくとも一部では継続される予定である。パリ大学の *Pangeo* 協会は、2020年から2021年の間に、1,200個以上の食糧援助をパリ大学の300人以上の学生に行った。パンテオン・ソルボンヌ大学を拠点とする *Co'p1* 協会は、週に800個近くの食料バスケットを配布している<sup>22</sup>。また、より地域に密着した *Linkee* 協会では、不安定な状況にある学生に、週に25,000食近くを配布して、2020-21年度全体で350,000食以上を配給した<sup>23</sup>。これらの協会は、大学や町役場、地域からの補助金を受けているが、他の協会からの寄付金や売れ残った食品によって上手く運営されている。学生の不安定さが増していることを受け、フランス政府は2021年1月25日から7月まで、大学内の学食で学生は一律で1ユーロ（130円）食事できるようにする政策を導入した。このように、学生を対象としたさまざまな形での国家支援や相互扶助団体は、衛生危機が学生に及ぼす非常に悪い影響を緩和しようとしてきた。

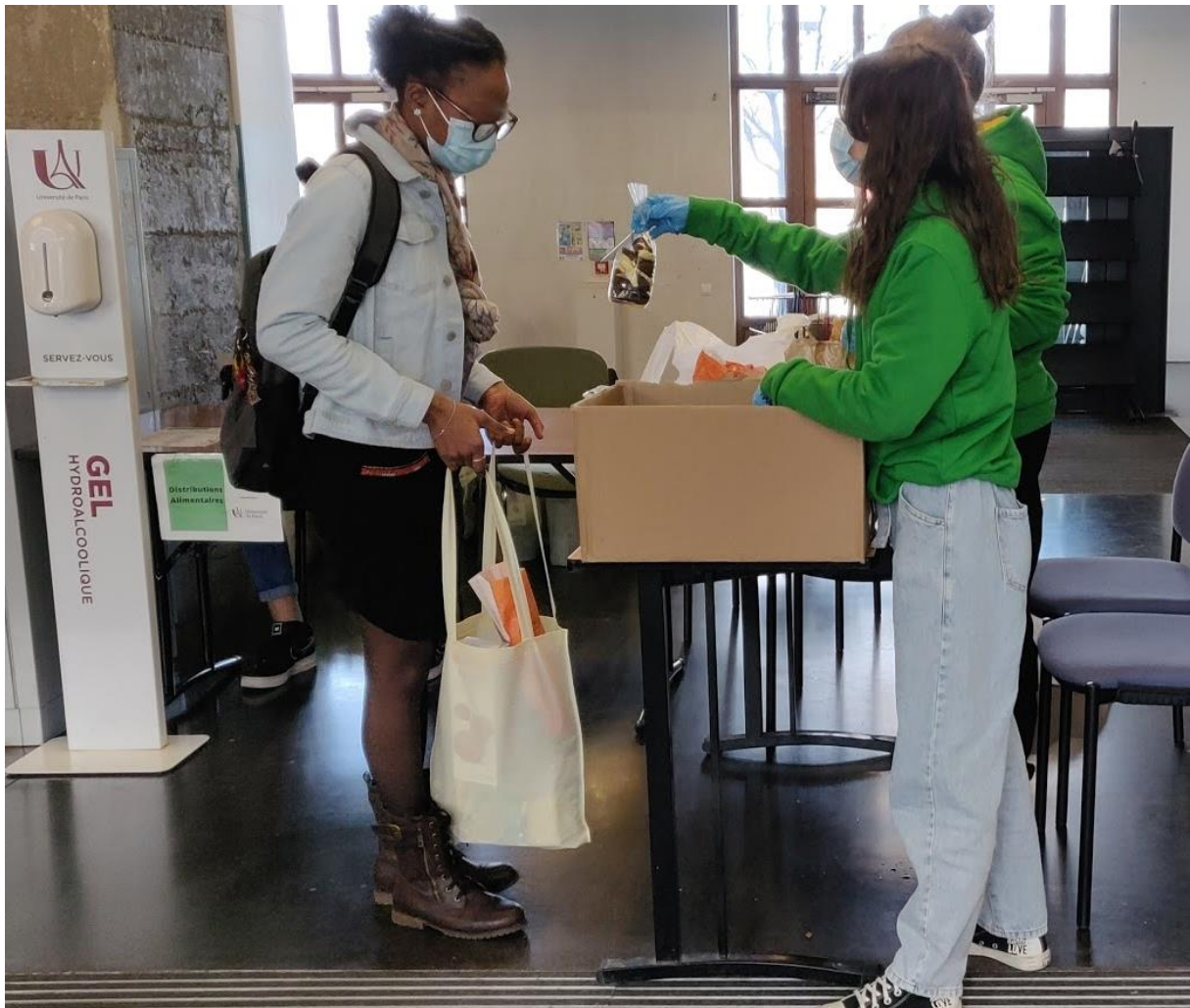


図2 パリ大学の *Pangeo* 協会の食糧援助活動

<sup>22</sup> *Co'p1 - Solidarités Étudiantes*, <https://cop1.fr/>, 2021年8月25日のデータ。

<sup>23</sup> *Linkee*, <http://www.linkee.co/>, 2021年8月25日のデータ。



衛生危機が学生全体に及ぼす影響について、このように比較的詳細に言及することは、コロナウイルス危機がフランスの考古学に及ぼす影響を扱う記事としては奇妙に思えるかもしれない。しかし、この学生グループ全体の中で、16,000人近くが「考古学、民族学、先史学」<sup>24</sup>の学部<sup>24</sup>に在籍している。また、フランスの大学では、歴史と考古学、または美術史と考古学の分野を組み合わせるコースを編成することがよくあるので、この人数には一部の歴史や美術史の学部<sup>24</sup>に在籍する学生も加えなければならない。

コロナウイルス危機がフランスの考古学を専攻する学生に与えた影響を具体的に示す社会的、教育学的データは現在のところ存在しないが、少なくともこの上記の要因が、部分的であれ、彼らに影響を与えていると考えることは妥当であろう。大学の考古学の教員も、2020年から2021年にかけて、学生の中退が増え、やる気をなくす傾向が顕著に見られると指摘している。

さらに、パンデミックの影響で国をまたいだ移動が数多く制限されたため、多くの学生、特に博士課程の学生が海外でのフィールドワークや研究を行うことができなくなった。これは、彼らの研究や論文の発展を妨げる結果をもたらした。

## 結論

衛生危機がフランスの考古学界に与えた影響を簡単に紹介してきたが、ここからわれわれは何を学ぶことができるだろうか。

考古学全体がコロナウイルス危機の影響を受け、特に様々なロックダウンや衛生管理を目的とする制限を受けた。異なるリズムや制限に適応することがいたるところで必要とされてきた。これにより、さまざまなレベルで、新しいやり方や新しい形の運営方法が開発された。数ヶ月間業務が停止し、新しい業務のやり方や形態を導入することを余儀なくされたにもかかわらず、専門的な考古学（事前発掘調査の考古学と考古学研究の計画発掘調査の両方）は、このパンデミックの状況による被害が全体的に少なく、考古学の知識を広める機関（博物館、大学など）よりも早く、ほぼ通常のリズムに戻ることができたようだ。一般市民や学生と直接接する、考古学的知識の普及や公開のためのこれらの組織は、その運営方法を深く見直す必要に迫られ、あるいは、その大部分が機能しなくなってしまった。

同様に重要なのは、衛生危機の影響で様々な考古学団体の機能が変化したにもかかわらず、それらが効果的に機能し続けたという事実だ。衛生危機の悪影響は、組織や考古学研究の進展よりもむしろ個人に及んでいる。この危機によって、科学としての考古学や遺跡や遺物よりも、それを運営し、命を吹き込む人々の方が悪影響を受けた。コロナウイルス危機が考古学に与えた影響を測る上では、考古学に携わる多くの人々が行ってきた適応や、回復力の向上のための努力、個人的に経験した苦しみや困難といったコストをとともに計算する必要がある。

---

<sup>24</sup> 高等教育・研究省の監督下にある公的機関での学生の就学状況数, <https://data.enseignementsup-recherche.gouv.fr/explore/dataset/fr-esr-sise-effectifs-d-etudiants-inscrits-esr-public/information/>, 2021年8月24日のデータ。

考古学においても、他の領域と同様に、コロナウイルス危機のコストは主に人間に関するものであったと言える。